



増長天



広目天



持国天



多聞天

四天王とは

元々はインドにおいて方位を護る神として信仰されており、それが仏教に取り入れられて東西南北の守護神として定着しました。日本の寺院においても、本尊を中心に四方に配置されている例が多くあります。

平安時代後期に造られた四天王像です。各像ともカヤの一枚から頭体幹部を彫り出す技法で製作されています。多聞天像の瞳が落ち込み、木製の目があります。また持物は全て後補で、彫り直しや後補部材も多く、大規模な修理を経たことを示しています。しかし、四軀とも概ね当初の姿を伝えていると考えられる点は大変貴重です。

穏やかな怒りの表情は平安時代後期の特徴を示しています。腰高で下半身が太く、甲締具で引き締めた胴部には弾力が感じられます。木造薬師如来立像と同様に、元々は月読神社内に存在した福養寺にありましたが、明治時代に両讃寺に移座しました。本像は、令和七年三月に京都府の暫定登録文化財に登録されました。

木造四天王立像（京都府暫定登録文化財・平安時代後期）



浄土宗 迎山
發雨 兩讃寺

福養寺とは

福養寺は月読神社内にかつて存在していた真言宗の寺院です。域内に六つの坊を持っていましたが、明治初期までにすべて廃絶しました。福養寺が廃寺になった際、什物の一部が両讃寺に移され、現在に至ります。

木造薬師如来立像（国重要文化財・平安時代前期）

平安時代に造られた薬師如来立像で、カヤとみられる針葉樹による一木造の彫像です。本像は頭体幹部から台座の蓮肉や心棒まで、両手先を除くほぼ全容が一材から彫り出されることが特徴的です。像の表面は、漆の塗布や彩色などを行わない素地に仕上げられています。うねりを伴って切れ上がった目尻や突き出た顎などからなる独特な面貌や、粘りのある彫法で複雑に折りたたまれた様子が表現された衣文など、奈良時代後半から展開する木彫像のなかでも特に強い個性を持っています。

本像の製作時期は平安時代初期まで遡り、京田辺市域においては、観音寺（京田辺市普賢寺）の木心乾漆十一面観音立像（国宝）に次いで古い像です。本像は、かつて月読神社内に存在した福養寺に伝来しましたが、明治時代に両讃寺に移座し、現在は秘仏として堂内の厨子に安置されています。平成二十三年（二〇一一）に京田辺市指定文化財に指定され、令和八年（二〇二六）には国の重要文化財に指定されることとなりました。市域ではおよそ五十年振りの新規重要文化財指定となります。

薬師如来とは

仏教世界において、東方の浄瑠璃世界を治めているのが薬師如来とされます。薬師とはもともと医者を意味し、病氣治癒に利益があるとされ、早くから左手に薬壺を持った像が盛んに造られました。



両讃寺について

浄土宗に属し、発迎山と号します。

慶長六年（一六〇一）に願故が創建し、万延元年（一八六〇）に善住が再建したとされます。

寺伝によれば、時の領主大住家友がこの地の城山に住み、西村の阿弥陀堂、東村の釈迦堂を信仰していましたが、織田信長に敗れ、両堂も荒廃しました。その後、橋本甚太夫と刀根源太夫の二人は堂宇を再建、二尊を遷し、願故上人に住持を依頼し、それ以後発迎山両讃寺と号したといわれています。阿弥陀如来と釈迦如来の二尊を安置したので両讃寺と名付けられたとされます。

